Development of a fall-prevention program for elderly Japanese people

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kato, Mayumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19520

平成　20 年 8 月 20 日

博士　論文審査結果報告書

報告番号　医博甲第 1985 号

学籍番号

氏　　名　加藤　真由美

論文審査員

主　査（職名）泉　キヨ子（教授）　印

副　査（職名）長谷川雅美（教授）　印

副　査（職名）塚崎　恵子（教授）　印

論文題名

Development of a fall-prevention program for elderly Japanese people

（日本における高齢者のための転倒予防プログラムの開発）

論文審査結果

論文内容の要旨

本研究の目的はエビデンスに基づく施設高齢者の個人の転倒リスクに応じた転倒予防プログラムの開発をスタッフのケア能力と動機向上を基盤としたアクションリサーチをとおして明らかにした。対象は施設高齢者の介入群 31 名、対照群 20 名である。スタッフは介入群病棟 14 名、対照群病棟 10 名であった。方法は開発したプログラムの骨子はスタッフ教育、個人の転倒リスクを見極めるアセスメント、リスクに応じた計画立案・実施、転倒予防チームによるコンサルテーションサービス、転倒が発生した場合は計画修正である。アクションリサーチは、介入群病棟で形成した転倒予防チーム員が研究導入に対する思いを表出した後、チームの「願い」のもとに、Newman M. の理論を用い、チーム員の 6 回の内省を通して遂行した。その結果、介入群の転倒率（回数）は 7.6 回から 5.0 回に推移した。損傷率は 41.9%から 9.7%に減少し有意差が認められた。一方、対照群に変化はみられなかった。介入群スタッフの特性的セルフエフィカシー尺度は 69.1 ± 7.0 点から 74.1 ± 6.1 点、勤労者用ソーシャルサポート尺度は 66.1 ± 11.3 点から 69.8 ± 12.0 点であり、共に有意差が認められた。対照群に変化はみられなかった。6 回の内省を通しては、5 回目から転倒予防チーム員の意識変革がみられ、6 回目では転倒・損傷予防は可能という達成感がみられた。以上から、このプログラムは有用であり、チームの内省のプロセスはエンパワメントが推進力であり、これがスタッフを根底から支えることが示唆された。

審査結果の要旨

この論文は転倒予防プログラムの開発をスタッフのケア能力と動機向上を基盤にしたアクションリサーチを中心にかつ準実験的手法でも明らかにしたところとが独創的である。スタッフのパートナーシップを活用した転倒予防プログラムは今後実践での活用が大いに期待できる。

以上より，本論文が博士（保健学）の学位を授与することに値するものであり，保健学における研究を自立して行うことに必要な研究能力を有すると認め，論文審査を合格と評価した.